

高津の民俗と高津姫伝説－高津のムラの姿と祭り

はじめに

旧村高津は、姫神の霊の宿る里。はるか古代、都からこの地に下った藤原時平の息女高津姫の流離譚にいろどられた伝説が、寺院やお堂、産土の社に息づき、神仏への信仰を通しての旧村のコミュニティの活動が今なお盛んな地域です。

高津姫の守り本尊を祭るといふ観音堂、高津山観音寺、産土の高津比咩神社を中心に、ムラにはさまざまな講やツジキリなどの民俗行事が継承され、また特に高津比咩神社が参加する「下総三山の七年祭り」は 2004 年に千葉県指定文化財に、「高津のハツカビシャ」は八千代市指定文化財にもなっています。

また「高津」という地名は、平安時代の『延喜式』に記されている「高津馬牧」の可能性があり、中世の城館跡といわれる武士の館跡をはじめ多くの歴史的遺産があります。

高津の「ムラ内」は、「中村」「南」「西」「新田」の 4 つのニワ（庭）に分かれています。

11 月 1 日に七年祭に三山へ渡御した高津比咩神社の神輿は、翌日の「花流し」の祭礼で、高津のムラ内を隈なく巡ります。その範囲は、ツジ（辻）と言われる地点、すなわち「ツジキリ」の行われる地点内で、かつて旧高津村の集落はこのツジの範囲にありました。庚申塔などが神輿の折返しのポイントとなっている場合もあり、高津の「ムラ内」は花流しの神輿の渡御によって認識されてきたといえるでしょう。

このムラ内の外の村域には田畑や山林などの「内野」「内山」が広がっていて、今はその多くが自衛隊演習地や住宅地、団地へと変貌しましたが、かつてはムラの生産と生活を支える重要な場所でもありました。

1. 高津は中世城館跡が残るムラ

(1) 高津館跡

高津館跡は、高津川と宮間沢谷津の合流点の右岸、標高 17m の台地にあり、東西・南北各 200m ぐらいと推定される。ゴルフ練習場の右の携帯アンテナのさらに右側の竹林に二重堀などが残っているが、残存する遺構は少なく、全体像はわかっていない。「根小屋」という屋号の家があることから家臣団の屋敷が麓にあり、またすぐ北西の付近に妙見社があることから、千葉一族の館であったと思われる。

2015 年に「e 地点」の発掘調査が行われた際には、障子堀が発見された。障子堀は、堀底を仕切るような土塁

状の障害物が連続して堀残された堀で、畝堀とも言う。山中城など後北条氏の城郭の特徴で、八千代市では初めての発見である。この畝のある堀は二重堀の北の角の外をさらに直角に廻っていたわけで、厳重な防御を施した館であったと推定される。

(2) 妙見社

千葉氏一族の守護神北斗北辰を祀る神社で、天文 11 年 (1542) 創建と伝えられている。

(3) 「正福寺之跡」の石碑

正福寺は新義真言宗。阿遮羅山と号した。高津比咩神社・高秀霊神の別当寺であったが、明治 10 年に廃寺となった。小字名「大門」は、この寺に関連する地名と考えられる。現在、この石碑は、観音寺墓地入り口の「正福寺記念碑」の手前に移設されている。

2. 高津姫伝説

平安前期、菅原道真を追放した祟りで亡くなった藤原時平の妻と第五息女高津姫は、東下りをして下総の久々田に至り、漂着した舟は石となった。母と姫は、花の洛の昔を偲び、亡父を慕い一堂を建てその御霊を「御山明神」（三山の二宮神社）として祀った。彼女が守り本尊としていたのが、行基作の尊像「十一面観世音菩薩」で、元は父の時平に伝えられ、高津姫に与えられたといわれる。

姫はこの地に堂を建て、その観世音菩薩像を安置した。母子亡き後、お堂は荒れていたが、雨漏りを応急措置した猟師が観音様に救われて蘇生したということがあり、また家人が、観音の慈悲の心をくみとり、その像を弄ぶ子供たちに与えると病気が癒えたとのこと。

正慶年中（1332～3 年）千葉之助後胤公がその因縁に感動して、村名を「高津」となし、お堂を改築し、霊社（高津比咩神社）に高津姫を祀り村の産土とした。その傍に創設されたのが、観音寺である。

天正（16 世紀）のころ、千葉之助の後裔が霊社を修理し、「大悲閣」を再興、荒廃することがないように良田を寄付された。〔以上『高津山観世音 略縁起』による〕

三山の二宮神社と津田沼の菊田神社の伝承によれば、時平の子孫である藤原師経が治承 4 年（1180 年）下総国へ流罪になった際に、到着地の久々田大明神（菊田神社）と移住先に鎮座する三山明神（二宮神社）に祖先の霊を合わせ祀ったという。

八千代市内には江戸時代初期に創建されたと推定される「時平神社」が 4 社ある。

3. 高津山観音寺とその境内

山門前右手に結界石「不許葷酒入山門」天保2年(1831)銘、左手に新四国霊場塔・道標「是ヨリみやま村神宮寺一リ・・・」文化6年(1809)銘がある。

正面に本尊十一面観音坐像を祀る本堂、左手前に八千代八福神の布袋様、本堂左の斜面に女人講(十九夜講・子安講)の石塔群がある。女人講石塔群の最古は延宝2年(1674)の六臂如意輪観音像、最新は平成26年(2014)の子安像塔である。本堂では毎月19日に子安講が行われている。

左手の坂を上ると、左側に間宮土信の墓(最近建立された宝篋印塔)と顕彰碑、韓国式鐘楼と関東大震災時の朝鮮人犠牲者の追悼の石碑がある。

4. 高津館音堂と埋葬墓地(埋め墓)と念仏講

高津では埋葬墓地がニシ(1997年高津西霊園に改葬)とヒガシ(2007年に高津東霊園に改葬)の二か所、石塔墓地(参り墓)が観音寺境内にある両墓制であった。

観音堂は観音寺に先行して、埋葬者供養のため建立され、その位置は中世からのムラ内の境と推定される。

観音様の縁日の4月18日と8月17日、高齢の女性が集まる「念仏講」が、この日だけご開帳された観音堂でおこもりをしていた。念仏講は、ムラの信仰行事に念仏やハナミを唱える重要な役割を果たしていたが、平成23年(2011)に高齢化のため解散した。

平成22年(2010)に西国坂東秩父百観音巡礼の「大願成就記念碑」を女性たちで建立。平成3~22年の巡拝の日程と人数が刻まれている。

5. 高津比咩神社

高津姫を祀るムラの産土で、境内の由緒書によると創立は明応元年(1492年)、祭神はタキツヒメ・コノハナサクヤヒメのほか、北斗北辰、間宮庄五郎源高秀など。

ハツカピシャ(1月20日に行われる弓射神事とオトウワタシ)は市の無形文化財、三山の七年祭り(後述)は県の無形文化財である。

6. 高津の庚申塔群

庚申塔は、庚申講(60日ごとの庚申の夜に集まって眠らずに供養と飲食を共にする講)がムラ内の境に建立した供養塔で、高津では、消防署前(現住所は大和田新田)の庚申様、宮ノ前庚申塚(2017年に高津比咩神社右横に移転)、自衛隊演習場内の馬頭塚(かつて三山への神輿が通った)、高津311三叉路の庚申様の4か所にある。

7. 馬頭観音塔群・辻切り・咳神様

ムラ内の境には、ソウマンド(葬馬廼)に葬られた馬を供養する馬頭観音塔群や、悪霊がムラ内に入らぬよう辻にはツジキリが設けられる。

新田の北田のツジキリの場所に祀られていた咳神様は、地蔵像残欠を「地蔵像跡」碑に転用した石塔で、2004年に観音堂前に移転。石塔石仏の残欠などを咳神様とする信仰は下総各地が見られ、その多くはムラはずれに多い。

8. 下総三山の七年祭り(千葉県無形文化財)

(1) 三山の七年祭り

七年に一回11月に、近隣9神社の神輿が三山二宮神社に集う安産御礼の祭りである。

藤原時平の子孫が久々田(菊田神社)に流れつき、二宮神社の神主となったという伝承があり、9社はそれぞれ時平の一族と結びつけられていて、二宮神社が父、時平神社は長男、高津比咩神社は娘とされている。

また一説には、千葉一族の馬加康胤の妻が二宮神社など4社に祈り、無事に男子を出産したことに由来するともいわれ、祭りの深夜に4社(父、母、子守、産婆役)は幕張の浜で「産屋の祭り(磯出式)」を行う。

(2) 2004.11.2~3の記録

高津では6月中旬の大祭の祭典委員長などの役員選出から準備が始まり、前日11月1日夕方勢揃い式と御魂遷しの儀が行われる

2日当日は、朝の7時に初輿式、県道から車で移動、三山の旧家2軒のヤドで休憩後、神揃場へ渡御。献幣の儀。午後3時頃二宮神社昇殿式、夜に高津に還御。

3日ムラ内巡幸の「花流し」、7時半初輿式。9か所のヤドで休憩しながら氏子の家を回る。午後屋台と巡幸。夜、神社で神輿揉み、8時半手締め、還輿式、御魂遷し。

おわりに

高津は、近現代に大きく変造した街ですが、旧村のムラ内の姿は、よく残っています。また、ムラの行事として祭礼や民間信仰も、高津姫伝承とともに、伝えられてきました。特に、ムラ内の境には、悪霊が入らないよう、ツジキリや庚申塔などを祀り、七年祭りの花流しでは、ムラ内の安寧を守るように神輿の巡幸が行われています。

また、広域な七年祭りの9社、市内4神社に、時平公とそれに関連する伝承があることも注目されます。

今回は、八千代市内の一つの旧村「高津」を取り上げ、近世以前のムラの様相についてご紹介しました。

ご清聴ありがとうございました。

なお、今回の講演に関連して高津姫ゆかりの地を訪ねる散策が、11月11日に、観光協会主催、八千代市郷土歴史研究会会員の案内で行われます。

